

行きづまると浮かぶ友の顔



高校時代は生物部に所属。花粉とアレルギーの関係や沼の水質を調査していたという野中正人さん



「カラオケを世界に広げるのが夢」という腰高博さん

実家はラーメン店を経営していた。部活の後、おなかをすかせた仲間が、一人二人とやってくる。そのたびに母親がラーメンを振る舞う。実家はいつの間にか、前高の

「今でも行きづまると、顔を見たくなるのは高校の友人です」  
ファッションセンターしまむらの社長、野中正

集合場所はいつも駅前  
の喫茶店。恋愛や政治、人生などをテーマに2、3時間、議論を交わす。「あんなに熱く語り合ったのは、高校時代が最初で最後」。全国にカラオケ店を展開するコシダカホールディングス社長の腰高博さん(56、1979年卒)にとって、多感な時代に腹を割って本音をぶつけあった高校時代の友人は、今でも一番の仲間だ。

東北大学経済学部3年の時、気丈だった父親が「店をたたもうかな」とつぶやいた。その寂しそうな姿が頭から離れず、卒業と同時に家業を継いだ。だが、経営してみると赤字寸前。そこで目を付けたのが、当時世の中に始まったカラオケボックスだった。ラーメンからカラオケに方向転換。人を驚かせる企画を次々に打ち出し、東証1部上場を果たした。

剣道部で汗を流しながらも、勉強一色だった。高校1年の英語の授業で、同級生がすらすらと音読する姿に圧倒され、「真剣に勉強しないと、ついていけない」と気づかされた。

しかし、仕事は楽しくて仕方なかった。上司を質問攻めで困らせながら、確実に自分のものにしていった。「この仕事が合っていただけ」と控えめだが、会社のことを話し出すと止まらない。全国の店舗を回り、社員らの声をくまなくすくい上げる徹底ぶりだ。

(浴野朝香)

高校生の時を「自信を失っていった時代」と表現する。前高の生徒たちは小・中学校ではトップクラスの成績。高校で自分が「ただの人」だと知るといふ。「みんなそれはもう優秀で。自分もやればできると信じつつ、自信はなくなる一方だった」

人さん(56、1979年卒)は、「高校2年の時からの友人と一緒に受けようと誘ってくれなかったら、今の会社にはない」と振り返る。中央大学法学部に在籍中、真剣に就職活動をしていなかったのを見かねて声をかけてくれた。出会いから40年たった今も、同じ職場で働く同志だ。